目の前の必要と 魂の必要に応えたい

おゆみ野教会など宣教チームが長期支援へ

3月11日に襲った東日本大震災。その2日後の13日には物資を詰め込んだトラックが東北を目指していた。長老教会・おゆみ野キリスト教会（ダニエル・アイバーソン牧師）などいくつかのチームや教会の協力によるものだ。迅速な支援の動きはどのように進められたのか。共同支援プロジェクト「ヘルプ東北・地震災害支援」が立ち上がり、継続的な支援をすでに進めている同団体のスタッフに現在と今後の支援について話しを聞いた。

仙台近郊（写真提供＝ヘルプ東北・地震災害支援）

千葉市緑区にあるおゆみ野キリスト教会は、アメリカ長老教会の宣教のビジョンによって開拓された教会だ。今回、支援の動きをいち早く取れたのは、「ダニエル宣教師の行動力と宣教師のネットワークによるところが大きい」とスタッフの堀野陽二さんは話す。「とにかく行こう」とトラック1台を借りたところから支援が始まった。

支援は、千葉や東京の宣教をカバーするアメリカ長老教会関係のチームが複数協力している。

届け先は、コンタクトの取れた教会だった。物資を毎日輸送する中で、グローバルミッションチャーチなどいくつかベースとなる教会を据えて、そこに物資を集約させた。13日以降は平日のため、ドライバーの核となったのは、宣教師や教会スタッフだった。「そんな中でも『週末は運転しますよ』と言ってくださる方もいましたし、カイロや衛生用品、食料、水などを提供してくださるたくさんの方々がいました」

最初は高速道路が封鎖され、一般道を走っていくしかなかったが、物資運送は警察に通行許可証をもらえば高速道路が使えるとわかり、時間も短縮できるようになった。25日まで2トン以上のトラックのべ26台が、物資を運んだ。不足の悲鳴があちこちであがっているガソリンも詰めこみ、第1フェーズとして物資運搬に重きを置いた。

◇

物資運送を初めて2週間がたった。様々な被災状況を配達途上で目にしてきた。「ある町は津波で壊滅状態。多くの市民が避難しているが、家が残っている一部の人がそこに生きていて、カップラーメン1個を数人で分け合っていると聞きました。また、放置されている遺体を生き延びた人たちが少しずつ埋葬しているそうです。助けが届かないところは、サバイバルモードになりつつあるという懸念もあります」

物資の届け先はコンタクトのとれる被災地の教会だが、道中で出会った人たちにおにぎりや水を分ける。とくに津波の襲った地域では、がれきの撤去や大切なものを探す住人らもいる。部分的に「物資は過剰」状態であっても、必要な所に必要な量が届いていない現実も一方である。

「引き続き必要に応じて物資の運搬はしていきます。地域のベースの教会から、行政の手の届かない人たち、地区にもなんとか届けていきたいです。そのためにもオートバイなどで運ぶことを検討しています」と同スタッフの高田正博さん。

「ただ、最初期の第1フェーズは終わり、第2フェーズに入りました。災害で受けた傷からのリカバリーをどのようにしていったらよいのか。メンタルケアのためのワークショップなども取り組んでいきたいです。心のケアのチームを送ることも考えています。カウンセラーや牧師がどのようなかたちで協力できるか、長期的な視野にたって支援をしていきたい」と高田さんは語る。

被災地に赴き、地元の人に水や食料を配っていると、「これ、どうぞ」とキャンディーを差し出されたという。「もう、持てるものがわずかなのにもかかわらず、そのわずかなものの中からぼくらに与えてくれようとするんです。そして『私たちがこんなにもらっては心苦しい』とおっしゃる方もいる。生死の境目にいる人はもちろん、これから復興に向かう方々のためにも何とかできることをしていきたいです。長い目で見て、福音宣教のうねりとなるよう、一匹の小羊もお見捨てにならなかったキリストのように、あきらめずに続けていきたいです」と高田さんは力強く語った。

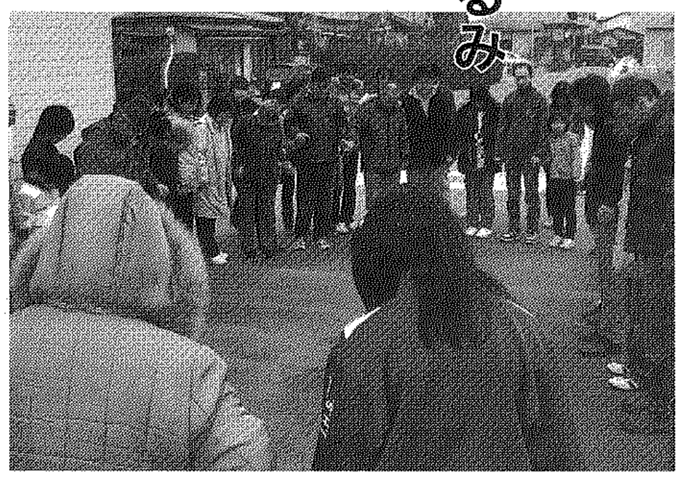
宣教師のひと言が
「ママ」たちの底力 被災地支援、地域ぐるみ

おゆみのキリスト教会のバックグランドであるアメリカ長老教会のミッションを受けて、開拓されたグレースシティーチャーチ東京（福田真理牧師）。本紙の「また行きたい！魅力ある教会」でも取り上げてきたが、同教会は「グレースシティリーフ」という災害支援ミニストリーを立ち上げ、ヘルプ東北・地震災害支援に協力して支援活動を行っている。

同教会の宣教師、アビ・ラウザーさんに話を聞いた。「地震の後、東北が大打撃だと知りました。何か彼らのためにしなければと、翌日から物資を集めて13日の夜に夫のロジャーが物資を運びました」。実際に被災地に行くのは夫だけ。自分も行きたい気持ちもあったが、幼い子どもを抱えてできない。一方で、アビさんには別の感情もあった。

「初めての大地震。本当に怖くて心細くて。本当はアメリカに帰りたい…そういう気持ちもありました。夫はいないし不安がいっそう強かったです」

しかし、夫の支援活動を支えていきたい。そんな思いを14日月曜日の午前中、幼稚園のママ友数人に話した。「私たちも何かお手伝いしたい！」皆がそう声をあげ、その場でそれぞれ友だちにメールで支援物資を呼びかけた。「驚いたことに、その日のお昼には、私の家は物資でいっぱい。数人から始まったのにその日だけで数十人の協力者がいたんです」


被災地では皆が心を合わせて祈った

人がつなぐ力は強い。協力者が増えた分だけ、できることも増えていった。「おにぎりを2千個にぎって届けたり、冷めても美味しいおかずを作ったり。それぞれが5合とか7合とかごはんを炊いてきてくれて、みんなでおにぎりをにぎって、明け方にドライバーが出発して物資を運びます」

衛生面でも細心の注意を払っておにぎりをにぎった

幼稚園のママ友や子育て中の人が協力者の中心ということもあり、紙おむつやアルコールティッシュなどの衛生用品など、何が必要かを知っている人たちの協力が得られていることも大きい。

膨大な量の物資のため、アビさんの住むマンションのフリースペースで保管されている。届ける時間帯が限られており、物資は手渡しで届けられるため、届く内容だけでなく誰が届けてくれたかもわかる。「物資として持ってこられても困るもの」が届けられるトラブルも回避される。

「千人以上が何らかの形で参加していると思います」とアビさん。

「すごく地震の後、不安だったけど、イエス様は私たちを最後まで見捨てずにいてくださり、いのちまで差し出してくださった。その愛を受け取っている私がここで逃げるわけにはいかない。祈りながら日々支援活動する中で、『ああ、イエス様は一緒にいてくださっているんだ。イエス様とともに行くんだ』という感覚が強くもてるようになりました。イエス様の愛とは何か。この活動を通してすごく分かりました。不安も恐れも平安に変えられていきました」

公式ウェブサイトやブログが立ち上がり、「ママ友」の輪を越えて支援は地域一帯に広がっている。名付けて「I love t」。アビさんの住む佃 loves 東北という意味を込めた。

「この町が一体となってこの震災に立ち向かっています。この町にとってもいいことだと思います」

今後、関東に来る避難民にどのようにサポートできるのか。長期的な支援をしていきたいと願っている。

【奥山みどり】

「町の復興見届けたい」
原発35キロ圏 鹿島栄光教会

原発から35キロ圏の福島県南相馬市にある日本基督教団鹿島栄光教会。佐々木茂牧師は、今のところ避難する予定はない。「私は、ここに赴任してきたのが昨年4月。やっと近隣の皆さんと知り合いになり、近所付き合いが築けるようになってきた頃でした。この町が復興していくところまで見届けたい。町の人たちも徐々に戻り始めています」

店も徐々に再会しているという。町の人口は1万2〜3千人ほどでそのうち3千人くらいが現在もこの町に住む。

「力んでいる訳ではないけど、大丈夫です。原発事故のために命がけで闘っている人もいます。灯油が減ってきている心配はありますが、でも大丈夫ですよ」

礼拝も祈祷会も毎週守られている。取材中、「大丈夫です」を繰り返していた佐々木牧師。不安、心配の種はいくらでもあるが、この町の「これから」への期待もそれ以上にたくさんある。踏み留まる教会が守られることも覚えて祈っていきたい。

【奥山みどり】

情報交
スト教

イブ・ホールデン氏、
援担当牧師スティーブ・
救
る。同教会では地域住民
の必要に応える様々なミ
で「災害に襲われたとき
牧会者として何をすべき
各自治体が埋葬を急いで
いる。そうした中で、限
の間で調整が続いていた
が、仙台市では仙台キリ
ンティア活動」を認める
形で10分間、読経や祈り
・カトリック共同で早急
に整えている。
拠点「仙台YMCA」を
「仙台YWCA」に訂正。
この願いに対して、私た
ちは何ができるだろうか。